

氏名(本籍)	佐藤政枝(徳島県)		
学位の種類	博士(医学)		
学位記番号	博甲第5495号		
学位授与年月日	平成22年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	人工股関節全置換術後患者の環境移行をサポートする教育・支援システムの開発		
主査	筑波大学教授	医学博士	佐伯由香
副査	筑波大学教授	医学博士	松崎一葉
副査	筑波大学教授	理学博士	志賀隆
副査	筑波大学教授	博士(医学)	林啓子
副査	筑波大学准教授	博士(保健学)	市川政雄

論文の内容の要旨

(目的)

人工股関節全置換術(Total hip arthroplasty: THA)後は、高いQOLを獲得する反面、脱臼や再置換術のリスクが伴うことになる。したがって、THA後患者のQOLの保障には、これらを生涯にわたって予防するための教育・支援が必須である。本論文では、THA後患者における看護的課題をふまえて、THA前後の患者を対象に、生活実態、脱臼回避動作の特性、再置換の関連要因、術前アセスメントの有効性に関する検討を行い、これらの結果をもとに、THA後患者のQOLに資する教育・支援システムを開発し、臨床応用の可能性を検討することを目的としている。

(対象と方法)

- (1) THA後患者265名を対象に、生活姿勢と手術後年数、住居の改造・工夫の関係性について、自記式の質問紙調査を行った。さらに、これらの対象者から12名を選択して自宅への訪問調査を行い、実際の生活場面と生活姿勢・生活動作との関係を検討した。
- (2) THA後の禁忌肢位をとりやすい動作をTHA患者6名と健常者5名に、実験室にて普段通りの方法で再現してもらい、三次元動作解析および三次元加速度計測により両群の動作を比較し、THA後患者の脱臼回避動作の特性を分析した。
- (3) 1976～1997年に初回THAを受けた患者112名を対象に、質問紙調査を行い、再THAに関連する要因ならびにTHA前後の生活姿勢の変化を分析した。
- (4) THA前患者9名を対象に、術前1ヶ月と術後3～7ヶ月の時期に自宅への訪問調査を行い、THA前アセスメントの有効性について検討した。
- (5) 上記の結果をもとに、THA後患者の環境移行をサポートする遠隔看護システムを開発し、看護実践モデルとして臨床応用の可能性と今後の課題を検討した。

(結果)

- (1) 質問紙調査の結果、入浴、就寝場面において脱臼の危険性の高い姿勢は、THA 後「3年以上」群で有意に高く、住居の「改造・工夫あり」群で低い結果となった。訪問調査の結果、危険な床座を避けるための物理的環境の整備と、安全に床座するための動作方法の習得が、THA 後の日常生活の変容の重要な要素として確認された。
- (2) THA 後の禁忌肢位をとりやすい動作において、健常者では股関節の過屈曲と内転、体幹の前傾が著明である一方、THA 患者では股関節の屈曲制限または過屈曲に伴う外転、体幹の後傾が脱臼回避動作として認められた。THA 患者の椅子を支持台にした動作に、股関節の顕著な屈曲制限と身体加速度の低下がみられた。
- (3) 再 THA に関連する要因として、初回 THA 後の「脱臼経験あり」、「道具の事前準備なし」、「排泄場面での推奨されない生活姿勢の選択」が認められた。食事、排泄、入浴、就寝、休息場面において推奨される生活姿勢が、再置換なし群の THA 前から初回 THA 後にかけて有意に増加していた。
- (4) THA 前に患者の自宅へ訪問しアセスメントすることで、対象者ならびに家族から「入院前に指摘を受けて退院後の準備ができた」「退院後も定期的に調査確認して欲しい」等の意見がきかれ、THA 前アセスメント実施の有効性が確認できた。
- (5) 上記の結果から、THA 後のリスクを定期的に査定して、支援プログラムを準備し、必要なときに必要な支援を提供するというケアサイクルを備えた継続的な看護実践が必要である。そのために、ICT を利用した遠隔看護システム『THA ケアネット』を開発した。

(考察)

THA 後には、「危険な床座を避ける」あるいは「安全に床座する」ための物理的環境の調整と動作方法の習得が重要であり、いずれも上手な道具の活用が必須であることが示唆された。また、THA 後のアセスメント指標として、入院前の患者の日常生活を基盤として退院後の経年的な変化をとらえることが重要であると考えられた。さらに、入院前のアセスメントにより THA 後のリスクを早期に予測し、必要な教育・支援を準備・提供して評価を行うために開発された『THA ケアネット』は継続看護実践モデルとして臨床応用が期待できることが示唆された。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、THA 後に起こる脱臼や再置換術のリスクに、どのような要因が関わっているのか、患者の動作ならびに住居環境といった多側面から総合的に検討し、明らかにした。さらに、リスクを回避する方法を対象者ごとにアセスメントして、情報提供するための方法として、『THA ケアネット』を開発し、その有用性を示した。したがって、本論文は THA 後脱臼や再置換術のリスクを防ぎ、QOL を向上させる継続看護システムを構築した点で多いに評価できる。

よって、著者は博士（医学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。